



奇跡は起ころ

〈福島県〉 野崎 利子 72歳

父が他界して、早7年の歳月が流れます。父を思うとき、心からの看護を受けたことに、決して忘れられない感謝の気持ちで胸が熱くなるのです。

95歳まで店の売上を数え、記帳してがんばってくれた父。でも年齢とともに、飲み込む力が徐々に弱ってきていたのでしょう。誤嚥性肺炎を起こし、呼吸が困難になり、車で20分程の病院に緊急でお世話になりました。主治医をはじめ、看護師、スタッフ一同、とても良くしてくださいました。6日目に入り、看護師から「ホントにホントに考えられないほど、次夫さんががんばっているのよ」との言葉がありました。私はその言葉がとても気になり、一晩中、

父を見守りながら考えました。そして、思い当たったことは「母に会いたい一心なのでは」と。

翌朝、主治医に「父がこんなになんばっているのは、母に会いたい一心だと思うのです。母はストレッチャーでないと来られない状態です。どうか承諾していただけないでしょうか」とお願いをしました。

主治医からは「皆と相談します。20分待つてください」と、そして「家族の思いに添います」との言葉に涙が流れました。ありがたくて、うれしくてとても心に染みるお言葉でした。すぐに家に戻り、母を連れ、「この橋を渡ると病院が見える、もう少しだ」と思ったそのとき。「次夫さん、もう危うい」との連絡を受けました。

母を1秒でも早く父の元へと思う皆の心が一つになって、4階の病室を開けたとき、奇跡が起こったのです。父の顔ぎりぎりに母の顔を寄せました。すると閉じていた父の目が静かに開き、母の顔を確かにしっかりと食い入るように見たのです。看護師が手と手を重ねてくださいました。それから1時間後、父は穏やかな安心した顔で旅立ちました。あの光景は家族皆の生涯忘れえぬ大切な宝物となりました。「人に寄り添うことが看護である」。この言葉通り、父の命の炎を最後まで大切に、そしてその素晴らしい看護プレーを見せていただいたのです。

